

時間の見通しをもちにくい生徒への支援のあり方

清水雅恵 酒井智美

1. 目的

時間を知る手がかりとして最も一般的なものは時計で、日常生活の中で私たちは時計を行動の手がかりにしている部分が多い。しかし、知的に障害があって時計が読めない生徒の中には、時間の見通しがもてなくて行動がスムーズにいかなかったりパニックを起こしたりすることがしばしばある。

そこで、生徒に応じた時計の代わりとなるような AAC やその他の支援は何か、2つの事例を通して探っていくことを目的とする。

2. 方法

作業学習（手工芸班）の時間に、時計が読めなくて時間の見通しをもちにくい生徒2名について、それぞれに合った支援を考え、それが適切かどうか検討を重ねてよりよい支援となるようにする。

3. 事例

(1) N男（高等部1年、男子）

①実態

てんかん発作があり、手指の動きはややぎこちなく歩行も不安定なので、常時教師と行動をとともにしている。話すことは好きで自分の思いを伝えることはできるが、パターン化した内容の繰り返しも多い。また、聞いたことを復唱するといった短期記憶力が弱く、教師や友達の名前がなかなか覚えられない。時間に関しては、1日の流れを登校、着替え、学習、給食、歯磨き、学習、着替え、下校（お母さんのお迎え）という大まかな流れでは捉えられるが、時間割まではなかなか覚えられず、「次は〇〇だよ」と声をかけても「はあ？」とピンとこない様子である。

②長期目標 「作業学習に意欲的に取り組む」

③経過

[1学期の目標：少しでも長い間作業する]

声をかけられてもなかなか作業の場所に行けず、直接手を引っ張られてやっと動くこともしばしばあった。次の授業への見通しがもてないために、行動を起こせないように思われた。授業中に居眠りすることも珍しくなかった。

5月の合宿で宿泊が嫌いということがわかり、「勉強しない人はお泊まりだよ」と声をかけると、サッと立ち上がって行動できることが増えてきた。次第に教師からの声かけも「作業したら、お母さんお迎えに来るよ」というような肯定的な言い方になっていった。

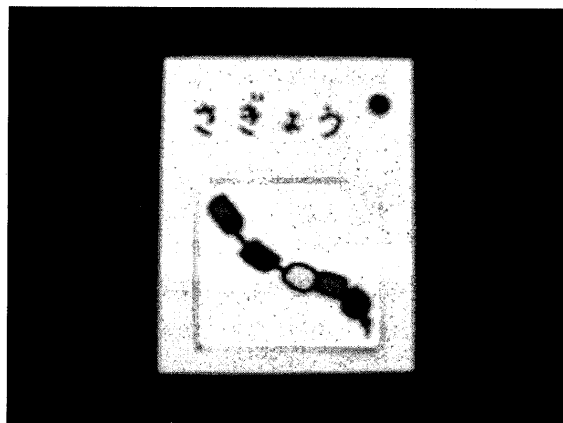
7月には、高等部のリズムに慣れてきたこともあって集中して意欲的に学習できることが多くなり、居眠りもほとんどなくなった。また、前述のような声かけだけでほとんど行

動できるようになった。それは、作業の内容がビーズを通すという同じことの繰り返しでN男に合っていたことによると考えられる。しかし、作業の場所に行けばできるが、そこに行くまでには声かけが必要であり、自発的に移動できないという課題が残った。

[2学期の目標：ビーズの写真カードを見て、次が作業学習であることがわかり、椅子から立ち上がる]

9月に自立活動で実施したNCプログラム発達アセスメントによると、聴覚による記銘があまり得意ではないことがわかった。そこで、声かけに加えて、視覚的支援として作業に行く前にビーズの写真カードを見せることにした。しかし、写真を見てもN男は「そうじ?」などと答えた。「ビーズするよ」と声をかけると、立ち上がってカードを手に持って作業の部屋に行くことができた。

10月には、写真カードでは「さぎょう」だとわかりにくいのかと考え、シンボルカードと同時に提示してどちらが「ビーズ」か聞くと、シンボルカードのほうを指さした。そこで、以後は写真カードではなくシンボルカードを提示することにした。



写真カードとシンボルカード

その後、2学期は継続してシンボルカードを見せているが、自分から「さぎょう」「ビーズ」と言うことはできない。しかし、「作業が終わったら帰るよ」と声かけすると、「わかった、さぎょうする」と言い、スムーズに行動できている。

④考察

当初は、最終的に1週間の大まかな時間割が覚えられればと考えたが、N男にとって時間割は複雑であり、なかなか難しいようである。次が作業学習だとわからない理由は、「さぎょう」という言葉が覚えられないことと、シンボルからもすぐには「さぎょう」がイメージできないことなどが考えられる。中学部のときは作業学習がなかったため、まだ「さぎょう」ということばがN男に語彙として認識されていないのであろう。しかし、シンボルカードによって発語することで行動を起こすきっかけとなっていると思われるので、N男が主体的に行動できることを主眼にして、継続して取り組んでいきたい。

⑤今後の課題

ビーズのシンボルカードだけでは難しいようなので、カードと同時に想起する手がかりとして語頭音のヒントも提示して、「ビーズ」「さぎょう」と言って自発的に作業学習に移動できるようにしたい。

(2) M男 (高等部3年、男子)

①実態

強度行動障害があり、自分が思っていたとおりにならなかったり予定が変わったりすると大声を出す、つねる、叩く、蹴る等の行動がみられる。時計は読めないが針の位置はわかり、「長い針が1にきたら4時間目が始まる」というような形で時間を意識している。真面目な性格で、作業にはとても集中して取り組んでいる。しかし、集中しすぎるために、たとえ途中でやめたくなくなったとしても、M男は「作業しなくてはいけない」と思っているため、途中で気分転換して休憩することは難しい。

②長期目標 「心理的に安定して作業を行う」

③経過

[1学期の目標：なるべく大きな声を出さずに作業を行う]

4月からランプ1つが5分の減時タイマーを使用しており、15分ごとにピーッと鳴るように自分でボタンを押してセットしている(写真1)。はじめはタイマーが鳴ると自分で休憩に行っていたが、次第に教師の「休憩しておいで」という言葉を待っていて、言わないと怒ったりすることも出てきた。作業内容が変わることもパニックの要因になると考え、1学期は小さいビーズを通す作業を継続して行った。しかし、日によっては作業の時間の終わりが近づくと時計をしきりに気にしてイライラすることもあり、タイマーを使用しても作業学習の終わりがわかることと結びつかないという問題点が見えてきた。

[2学期の目標：作業の終わりの時間がわかり、落ち着いて作業する]

そこで、10月からは時間の長さが視覚的にわかるよう、タイマーが1回鳴るごとに枠に数字カードを貼っていくことにした。枠がいっぱいになることは作業の終わりを意味し、具体的には、午前中の作業の時間は約100分間なので、15分×6回で作業終了と考えて写真2のような枠を用意した。始めは、タイマーが1回鳴るごとに数字カードを手渡していった。すると、2のカードまで貼ると「3、4、5、6」と枠を指さしながら声に出して、6で終わりということ意識していた。また、数字カードを貼るたびに枠の空欄を指さしながら見ていた。5のカードを貼ってからは、時計を気にしながら少し声を出すことがあったが、6のカードを貼るとすんなり終わることができた。

数字のカードは、次第に自分でタイマーが鳴るごとに枠にあてはめていくようになった。

しかし、イライラしているときの様子を見ていると、M男にはひとつのランプが消えるまでの5分は長いように思われたので、ランプひとつが1分の減時タイマーに変えることにした(タイマーのボタンは写真1と同じ。押すボタンによって5~20分に時間が設定できる。)以前のタイマーと比べるとみるみるうちにランプが消えていくので、M男もちんちんとタイマーを見ながら落ち着いて取り組むことができていた。枠は20分のボタンを押すと終わりになるように、午前、午後ともに一つずつ減らして5つにし、作業の終わり

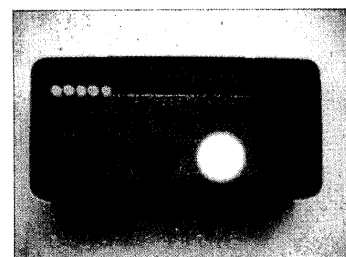


写真1 タイム・ログ
(五大エンボディ社)

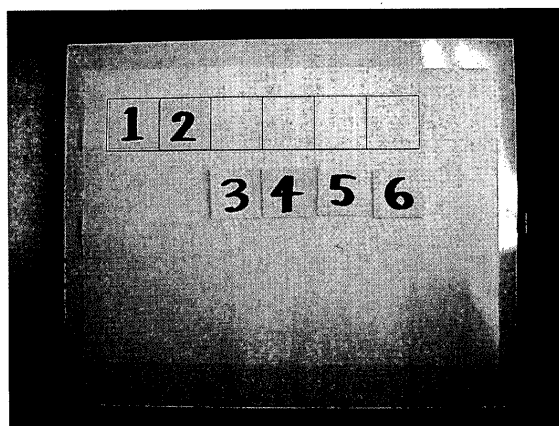


写真2

の時刻を示した時計の写真を加えた。このとき、20分のボタンを押すようにとはM男にはっきり提示しなかったので、いろいろなボタンを押して試しているようだった。しばらくは、このパターンで比較的安定して作業に取り組んでいたが、枠がいっぱいになって作業の終わりまでに時間があるときはM男の好きなカセットを聴いてもいいことを伝えると、それもパターンの中に組み込まれていった。

ところが、11月の下旬から別のパターンが出現してきた。5分のボタンを押し続けるようになったのである。うち1回は10分のボタンを押すこともあったが、その結果、30分足らずで作業が終わり、残りの時間はカセットを聞いて過ごすようになった。

これまで、どんなにイライラしていても休憩せずに時間まで作業していたM男が、自分の意思で早く終わる方法を選んでいることを評価し、しばらく様子を見ることにした。しかし2週間ほどこの状態が続き、M男自身も時計を見て、作業の終わりにしては早すぎると感じるようになったのかけげんな表情をしていたので、もう少し長い時間作業に取り組めるように新たな試みを始めた。午後なら4回タイマーのボタンを押すところ、始めの1回は15分（黄）か20分（赤）のボタンを押すようにカードで提示すると、M男は「青（5分）」と答えたのである。

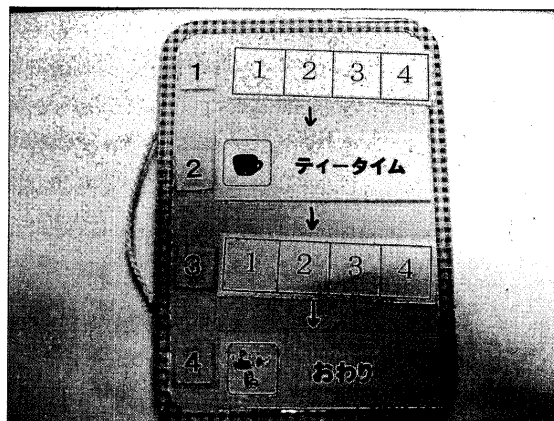


写真3

2回目には黄のボタンを押したのだが、本意ではなかったようでイライラしていた。

そこで、5分のボタンを押す回数を増やすことで作業時間を長くしていこうと考え、写真3のように5分×4回のあと、もう1回5分×4回するよう提示すると、少し声を出したものの最後まで落ち着いてできた。実際に作業している時間は約2倍の50分程になり、その後も1週間安定して取り組むことができた。

④考察

はじめは、M男がどうしたら作業の途中にトイレ以外にゆっくりと休憩ができるのかということを考えていたが、結果的には少し極端な形であるが、最後にまとめて休憩するようになった。また、いつも時計の針を気にしていたM男がタイマーだけを見て行動するようになり、M男にとってタイマーが時間の目安として一番わかりやすいものになっていったといえる。M男自身がパターンを選んで変わっていくことを受け止めて教師が適切な支援をしていくことが重要なのであろう。

4. まとめ

2つの事例を通して、時間という目に見えないものをいかにしてわかる形で伝えるかということの難しさを知った。M男の事例は、環境を整備して心理的に安定して作業することを優先したことにより、M男自身だけでなく他の生徒の心理的な安定と作業グループ全体の効率を高めることにつながり、今のところうまくいっている。活動する順番や時間的な長さがわかることは学習の意欲や効率につながり心理的にもプラスになるので、今後もさらに他の場面でも支援を考えていきたい。